



洋学文庫
文庫 8
C 269
3





泰西七金譯說卷之三目錄

錫

性質

產處並錫鑛種類

性德

製錫粉法

製錫灰法

製錫鹽法



用錫製束針紋鹽法

用錫製モサイス金法

鉛

製燒鉛法

製鉛灰法

製鉛黃鉛丹法

製宮粉法

製鉛砂糖法



製マギステリウムハンロート法

製鉛油法

至鉛或錫鎔不變灰法

復鉛製茶品於生鉛法

用鉛製水銀法

以鉛製銀法

云ひし物ハ錫なりしと必せり

性質

錫ハ色白く銀色に近し而して鉛の如く青色に
帯ふるを少し此を潔白よなきんハ「レジユス
ペンチモ」に加へ鎔化をうう又ハ浮石を極末
にちし此を以て琢磨をへし殆んと白銀と等し
く潔白よなきあり

錫ハ鑄流をへし諸金の中於て最も軽し其重

さ水と比較を重しと七との如し又金と錫
との重さを比較を重しハと三との如し又錫は
りハ脆くして反て錫より重し金より此れ他な
らす全く其質肌気眼の疎密に因るなり乃錫鑛
ハ反て精錫より重し
錫ハ柔軟にして鑄流をへし又撓むへし其撓め
鑄流をべきの質ハ鉛と甚と異なり但し錫ハ
撓免んとをとり此ハ少し音をなす鉛ハ然らす

大きき錫と鉛とを鑑定し差別をす一頭徴とを錫
も亦鉛の如くに薄く鑄流を考すとも亦是ハ甚
た破裂し易し
錫ハ一種の奇質なり即錫を諸金に加へて鎔
化するときハ其金をして堅脆なりしむ又音響
益を造るへ此金に亦是を加ふるときハ其金好
音を発を故に此錫の奇質ハ物に因り用ひ方
随てハ裨益あり即金として硬脆なりと考んと

欲を乃^ハ其金の一分程の錫と取り其金に
加へ鎔化をす自註鉛と印^ハては又錫の蒸
気ハ其金に當てて同く脆くあるなり又錫
ハよく他の諸金に接着をす故に鉛を鍍すに鍍
貼して其錆を防ぎ止む但し錫ハ其鉛鍍に侵透
をす小因て鍍錫したるは堅脆をありて破裂し
易し又鉛鍍等も鍍したる錫ハ亦是を再び分離
をす易なり故に製煉家錫の一名はトイフ

ル。デルメタールと云ふなり 按は諸金鬼神義

錫も鉛と同しく微火にて鎔化をへしおき或武
火に上せ急よ鎔化せしむるにハ其化錫の面
は薄膜を生をへしこれ他なき錫の焼けて灰と
かりたきなり乃鎔化をよ至てハ鉛と異なる
とれし唯少しく硬軟の違ひあるれも但し錫ハ
武火にて急よ鎔化せしむるハ其ポロギストに
按は火成を成脱失をるなり 其金

瓦磚の上よ錫を上せ此液顯微鏡にて取りたる
太陽の火気よ當るとにハ自然よ太ある絲の如
き煙を發し且其錫ハ輕き白色の粉末となり終
よ束絲状をなす此束絲状をなしたるハ猛
火成以てると雖とも鎔化をよとれし尤も大
きし黒色のもれ或ハ木炭の粉末の類を加へて
鎔化せしむるとにハ再ハ原との錫となるなり
錫の鑪子屑成燭火に當るとにハ其錫屑音色よ

変し且硫黄の香あり煙と発を又此の煙ハ少く
く大蒜の香あり錫或鑪壺に投し此を硝石或
加へ鎔かをも此ハ其錫全く化せを此より因て
考ふるは錫ハ一種自然より束針様となりたる上
自註は曰ち此ハ火より上をとりと一種の硫黄と
いへとも鎔化せざる物なりと一種の硫黄と
又少く鑪石相和して成りたるものなりん
錫ハ解化液にてよく化を乃強水王水等も投し
て甚とよく化を錫ハ錢を化をるは毎に王水

十二錢を以てを其六を解化したるは清水よ
て水飛をると此ハ其錫悉く白灰となり此白灰
と取て酸液中に投をきハ又再び解化をるなり
産處並錫鑛種類
錫ハ他の諸金よりハ産をると都て少く又其産
地より因て速く鎔化をるあり或ハ速く鎔化せさ
るあり又錫鑛ハ可用と不可用との二種あり

錫ハ諸厄利亞の産と以て佳品といふ即諸厄利亞
國中なる格倫耳及此近傍の地より夥しく
産を勃加尔多人曰貌利太泥亞按は諸厄利亞
總名也のハ錫を産するに甚多き故に把爾尔
斯人なる者爰に來て此地を錫王国と名けたり
と此を實説なりといふ諸厄利亞の西南に當て斯
吉尔歷意と云ふ嶋あり此を厄尔西亜国呼て加
斯西的里送斯と云ふ即錫の充滿したる国と云

小美なり窮理家の布里泥烏斯人曰錫ハ密香里
久斯人なる者始て加斯西的里送斯諸島より歐
羅巴に持來たりと東印度にも錫あり別て滿刺
加小多し然れども此地の産ハ諸厄利亞産の錫
と其質性を異なす故に彼産と此産と相共み鎔
化をるといへとも容易に相和合せを波亦米亞
及ハ沙瓊泥亞にも錫坑あり
諸坑内には必を錫あり然れども都て眼に見へ

も即坑内なる砂石の黒色或ハ黄色或ハ白色或
ハ透徹を有するものを採て鑑化せしむればハ其中ハ
少一つハ錫あり又錫ハ總て他物と混交して
り即白石中亦あり或ハ黒石中ニ在る事
あり其石を採て切斷をせしハ銀色の線ありあり
即錫なり又其石は柔にして採て碎くべ
し或ハ堅くして火に焼切をせしハ碎くべ
らざるものありあるものあり

自然の純錫あり或ハ世に記録せる者あり色は
実ハ未と大さ成見たる人なり即皮休郭鉄樹人
君曰古より嘗て純錫を見たる人なり寧錫鑛と
種々あり左よ大さ成録を

第一 形ち水晶の如しあり故に或等類を
一稱して錫石と云ふ其色黒く稜角をなす声あ
り礬石の如く帯ふ大さ甚と大なり時として
ハ穀粒の如し小なるものあり故に此を錫名多て又

粒鑛と云ふ此類の鑛都て最上品の錫と出以
第二 柘榴子鑛と名く大ま其形の相似たる以
以て命名せり大まハ黄金色なる有り或ハ紫
色なる有りされ亦佳品の錫を出す此類多く蘓
亦齊亜ノ産を

第三 蘓亦齊亜鑛と名く獨逸都国の近傍ノ産
を大まハ混交したる物甚と多く外状ハ鑛
の似たり其色紫黒色有り或ハ赤色なる有り或

ハ黒色なる有り此類凡皆少しく錢氣含む
第四 白錫鑛と云ふ大ま右の三種よりハ甚と
希れ有りキハ觸ると死ハ脂氣何もの如く色
少しく黒色を帯びたり
右四品の外ハ尚別種の錫鑛あり大ま等ハ皆多
く礬石混交したり故ハ甚と堅脆にして用也ハ
うらに然まとも其礬石の元以除き去まハ猶用
也ハ

又錫鑛のこふ於て心得へ此あり即第一ハ錫ハ
礬石或加ふまハ再ハ始めの錫鑛の状ハ変を第
二錫鑛ハ他の諸金鑛の如ク異類の金と帯ぶ
るとなり第三ハ錫鑛中自然ハ交和したる異
質のものハ其錫或して硬脆なりしむるあり
諳厄利亜よりハ純錫鑛と産をあるハ異質の
もの少も混和したるをれハ左ハ格倫罰耳地
於て鑛より錫と分離をハ常法或説くハ

錫鑛を採り雜石或除地鏡白ハ入水或少ハ
加へて搗き末とな然るときハ錫粉ハ沉底
土氣ハ上ハ浮む而て其浮したる土氣を除き
去リハ此を其粉末ハ搗き碎けの間に水
交ハ碎き水ハ洗除き去り其混あるハ木炭を加
へて陶壺ハ盛り竈中ハ投ハ鞆或以て火勢或盛
よして鎔化せしむるあり鎔化をハ錫ハ自
ら其壺底ハ聚り沉む沉したるハ砂或以て造り

たる模範^{イダ}の流し入して大塊をなす蓋し此の大塊を鑄流したるもの、上部ハ甚々軟柔にして焼むべく且餘り軟柔なる故ハ大塊此ハ用ひへうす毎ハ銅を加へて用ひるなり但し此上部の軟錫一百觔を用ひると此ハ銅三觔加へ又其中部一百觔ハ銅二觔を加へ鎔化して用ひるなり其下部の如きハ錫の最も下品なり、所^イにして甚々脆く取り扱ふ可らず故に此

脆錫一百觔ハ銅十觔を加へ鎔化して用ひるなり、諸厄利亜より我邦に輸送する錫の形は種々あり、挺竿となしたる所^イ或ハ塊となしたるあり、此塊と名したるは名て「サウモン」云ふ又長くして薄く板に造る所^イ此を名て「シリ」云ふ一名「ベルゲ」云ふ其挺竿となしたるハ三觔より三十五觔まであり又其塊となせるハ二百

五十觔より四百觔まで此ものあり又其薄板と
なしたるハ都て凡そ半觔あり
印度の中伊斯巴泥亞人の住居をなす地より一
種の錫を産を其質甚と軟柔よして凡そ皆一百
二十觔より一百三十觔までの塊となしより又
暹羅国シキよりも錫を産を皆槌竿とれしたり哈皮
休耳ヒル地チより我邦に致を獨逸都國産の錫ハ塊
となしたるあり又小竿となしたるあり其塊と

なしたるは二百觔より二百五十觔までなりあ
る又其小竿となしたるハ八觔より十觔までれ
るあり其形皆試金石に似たり此獨逸都國産の
錫ハ皆以前に彼邦に於てブリキ錫按は延鉄延と鉄鉄
以製するに用ひて其餘分のものなる故に其品
稍劣る

性徳

錫ハ家用に甚と有益の代あり即孟四燭臺茶

瓶其外日用の器具凡そ皆錫を用ひ造らざれば
なり又其薄く紙の如く打延ハしたるハ多く婦
人の粧飾に用也

錫の徳最も多しといへとも就中其要益をなす
ハ即ち毒を銅に鍍せると此ハ銅の毒を防ぐこ
れ有り故に食料を納むる銅器ハ皆鍍錫して大
きく用也るなり

紙の如くは薄く打延ハしたる錫ハ専ら硝子匠

は於て大きく用也即錫ハ水銀とて硝子は固
着せしむる功あり故に硝子匠は於てハ其薄く
打延ハしたるものハ上ハ水銀を流し去るを硝
子匠は着けて以て鏡となすなり

錫ハ甚く解化し易し至て弱き解化液は以ても
化せしなり蓋し錫を解化したる液汁ハ物ハ黄
金の混交したる有無を試み知るハ要菜と以て即
金を含有したる物ハ此の解化液中に投をせし

其色自然に紫色に變をまはかり
又錫ハ緋羅沙を染むるの要菜とす赤色に染む
るものは即「ゴ」セニル名蟲の煎汁と強水と以て
を然る小強水の性もの故に侵蝕をまよのなり又
錫ハ強水の侵蝕をる氣を防ぐ性有り赤色に因
て緋羅沙を染むる液汁にハ必をらゆを加ふる
なり且赤色に加ふるといへども其美色を失を
る等のと絶てなり

錫を解化したる液汁に金を解化したる液汁と
交和し且赤色に清水に投入せると其底に
紫色の粉末沉着せしれ陶器を染め盡く顔料と
なりなり
錫ハ内菜に用ゆるを稀連なりといふ
の鑑子屑を三分より一錢の間を数日用ゆまハ
子宮病肺病を治すと云ふ
左に錫を用て製茶の諸法を説く一且其各品

の功も亦記す

製錫粉法

銅鉛等の混和せざる精錫を採て鎔化し而して
一箇の木筭を取り其内面は白土を塗り置き此
中より右の化錫を流し入きて其時或移さば直に
筭或動揺をへし錫粉末とならばあり但し其末と
粉よりなるとは所々を再ひあをを鎔化し又始
の如く筭の内面は白土を塗り其中より流し入きて

て動揺をへし斯の如く其錫の盡るまで数回な
すと凡は其毎度錫粉少くは或得るなり了全

此錫粉は諸菜を眼せしめて功なき虫夷即其形

は用て甚く功あり分量は三分たり一錢を度と

す又唯二三重用ゆる人もあり

製錫灰法

錫を陶器に入きて鎔化し錢篋或以て絶へを是
と攪勻を可し即自然に灰とならばあり此主治右

小云ふ錫粉と相同し又云ふ錫粉と相同し

製錫鹽法

錫灰一筋王水三十二錢を採り清水此二品の六
倍成加へ以て煮ると砂火よて二日の間而後よ
攪勻し錫灰既よ沉底したるハ其濁汁を除き去
りて又火よ上せ九を錫灰の乾くよ至るまで此
を蒸散せし免既よ乾死しハ紙上よ移して全
く乾くす可し全く乾きたるハ此粉末の半分不

どの玉水を取り又都て始めの如くをハ終

錫鹽成得るなり其餘其餘其餘其餘其餘其餘

又一法ありハ其ハ鎔化持たし錫を冷水よ搞入
して小粒となす但し其ハ其ハ其ハ其ハ其ハ其ハ
人ハ玉水成採て共よ右の冷水中よ徐々よ入加
を而後よ其王水の気漸くよ散脱し盡しと思は
ハ其上清成去るし一し沉底をるものあり此を採
て砂火よて煎熬をへし終よ乾鹽となれり此

錫鹽ハ専ら外菜ヨ用也即和らめ小瘡ノ乾クす
功あり

用錫製末針紋鹽法

精錫の細粒又ハ其鑪子屑十六錢六分ヨ丹礬油
四十錢或加へて口廣の玻璃壺ニ納き猛烈の砂
火ニ上せ殆んど赤きヲ乾くニ至るまで蒸散シ
而して火を下シ若シ其錫塊凝セハ適宜の分量
乃水を加へ又赤化を微火ニ上せシ自然ニ解

化をるなり此を採て瀉す此瀉したる或又火ニ
上せし程よく蒸散せし先而後ニ冷凝せしむへ

針末針紋鹽となり

又一法ハ錫灰師前法ヨ用て一觔を採り蒸露

罐ニて引きたる酎三百錢の中ニ投シ火ニ上せ
屢攪勻シ其酎の味ハの甘くなるまで煮而して
後又大き或蜜の濃さ小なるまで蒸散せしむへ
既ニ蜜の濃ふなりたるとハ此ニ十分一許りな

る上品の葡萄精を加へ且漸くは其火を減少を
へし自ら塊凝して束針紋鹽と云ふあり

此法以て製したる束針紋鹽ハ坚硬よりて透
徹し無色なり味辛うらす往古ハ専ら此を子宮
病ハ賞用せり然も後漸く其功なきと世ハ
知き今時ハ更ハ用ゆる者なし故ハ今ハ茶店に
於てもありと製せず
此束針紋鹽ハ王水又ハ清水に化けて白粉ハ用

也即名て「マギス」云々ハ「マギス」云々
ハ「マギス」云々ハ「マギス」云々

モサハ「金ハ羅甸語呼て「アウ」云々
云ふ此製法ハ精錫一筋硫黄花按てハ硫黄
製を了如く精粹外假其塊五十六錢確砂及ハ
精潔の水銀各半筋と以てを即先つ此錫と鎔化
し大匙ハ右の水銀を加へ而後ハ冷し細末とな
すへし此細末を採て右の確砂及ハ硫黄花と交

和し共よ「コル」按止「レ」の類よ入を煨をるときハ
所謂「モサイ」金泡と共よ器底よ沉着をるなり
此を既よ煨し終りたるハ其「コル」と打ち破る
べし「モサイ」金ハ必を沉底し其上よハ礪砂硫
黄錫丹等の相化したるもの附着したるなり右
の分量以て大を成製す其製し得る所の
分量ハ及て其られし用ひたる錫の分量よりハ
重但しあまら黄金色よなるハ全く硫黄の色

の錫よ移りたるあり乃試こにあら成微火上よ
炙ると死ハ少しく煙を發し其黄金色忽ちよ変
して錫色となるなり又此変色したる成鑪壺よ
納免「ス」ル「ル」ト「ト」此「レ」類「レ」炭粉の成加へて鎔
化せしむると死ハ再以始の精錫となり且其分
量少も始め用ひしと異なりとなり
斯の如く製造したるを「モサイ」金と名をくハ
其色光澤ありて黄金色なり故あり畫匠ハ専ら

むら故かり又此を火に投をると此ハ甚と速に
化して或ハ灰と作り或ハ密陀となり或ハ硝子
様となり或ハブルト此の粉は花の義即精粹とな
り或ハ鉛黄となり或ハ鉛丹と作りと見えハ水
銀も亦自然に含有したると見ゆるあり甚と解
化し易し即気の弱き酸汁に浸して解化を能く
金銀中に混交したる不潔のものを除き取る乃
金銀を純精となさんと欲せると此ハ多く鉛成

加へて鎔化を鉛亦即其不潔のものと悉く集免
且引て鑪壺の下より漏出を但し止せし用ゆる鑪
壺ハカペル此は前巻中製と名くるも
のなり都て一尺方面此は尺三分餘の寸の鉛乃
重さ八九百二十八筋此は筋六錢の當りあり
鉛ハ皆坑中の鑛石を取て鎔して得るなり此鑛
石は硬軟の二種あり緑黄赤白黒の五色あり其
黒色なるより製し採りたるは級上品とい甚光澤

あり然まとも大まハ容易ニ鎔化せを或人曰多少
ありといへとも諸種の鉛鑛皆銀と含有を
獨逸都国拂郎察国及び諸厄利亞国の中ニ鉛坑
あり此諸坑より得る所ハ皆延版或ハ挺竿ニ造
り成して諸州ニ致す時として坑中ニ於て純鉛
成得るとあり然まとも甚と稀なりと云ふ
鉛を用てハ屋根瓦水盥鏡丸分銅等の類を造る
畫師漆師陶工等亦多ク鉛を用ゆるとあり瘍醫

家ニ於てハ生鉛及び製精鉛共ニ専ら硬膏軟膏
塗茶等ニ用ゆ

都て鉛製の茶品ハ内腹をへりし甚と害あり
往古ハ鉛製の茶品別て鉛砂糖の如きハ癆瘵諸
熱病脾病癩瘡疾等の奇茶として専ら用ひたり
然りといへとも今時ニ至て甚と大まを恐ま悪
く其功をなすよりハ反て害成なすと大ありと
す何んとなすハ譬へ大ま右の諸病を治する

とありといへとも後必を中風卒中等の老病を
発し終は死をふ及ふへく実小輕疾治し
て重病越すと至る豈恐るべきと小ありさ
らんや鉛の害成らずとの證ハ即恒は鉛を取り
扱ふ人ハ後必を中風疝気の病成煩ふべき其確
證なり

前件小云ふ如く鉛ハ甚く弱兒酸汁にて解化を
即酢と煮てろ過し鉛密陀と投せると兒ハ自

ら解化し且白粉と成て其底は沈むこの沈底は
たふハ即解化を可らさる一種の鹽なり其これ
を煮とみ上汁を取て濾し器に納め火の上せ蒸
散煎熬をふときハ束針紋成あり鹽とある此鹽
成名て鉛砂糖と云ふ製法後

鉛板成取て葡萄酢の蒸氣に當つれば自の化
して白粉とある此成名て宮粉と云ふ畫匠深
師ハ専ら此成用也但し此粉を加へたふ顔料

ハ其色甚と変易し
鉛砂糖或解化したる液汁ニ蘇蓬鹽或加ふると
きハ悉く其蓋底ニ沈む此沈底とるを名て「マ
ギスエルクム。ハン。サエルクエ」と云ふ

酸味を生したる酒或以て鉛を解化をへくと云
ふと世ニ知きて後又鉛或用て酒の酸味を除き
甘く始りの如く其味を復せしむると或發明せ
る即酒匠にてハ少く汚て酸味或生したる酒

中ニハ鉛を入きて此を補ふ此酒或飲む人ハ後
漸くニ病或生を突ふ此の如き酒或賣るハ當ニ
漸環毒と賣ると其罪相同し此れ嚴禁をへきと
有り若し強て此禁或犯を者ありと毒殺人と罪
或同一て可なり執政官ニ在てハ此禁令或出さ
ずんハあふ危ううさふ有り獨逸都國中レイニ
河の岸傍の地にてハ數酒ニ酸味を生を爰ニ於
て此れを鉛或ハ密陀を以て直して欺き賣る者

阿耨多羅三藐三菩提行ふなり鉛或ハ密陀を調和
たふ酒と交和せざる酒と以て鑑定せざる法を酒の
條下ニ詳よす都て生鉛別て其解化ししる之の
れ如きハ大毒あり譬へ人鉛製の茶具成膜して
も其毒忽ちニ面顯せざるといへとも後必を難
治の疝癩神經の顫惕成癆一或ハ死症の難病成
間々癆をふなり

製燒鉛法

錢匕或ハ陶器ニ鉛灰入を鎔化し之れニ硫黄成
徐々ニ加へ絶へを攪勻をへり而して鉛悉く粉
末ニ化せざる迄火上ニ焼くへり既ニ粉末と有り
たゞハ火より下ニ冷して揉み碎き篩りて瀝を
逐し瀝し了るにたらハ此末成水にて洗ひ灌き而
して乾らし貯ふ瀝し此を燒鉛と云ふ若し未と
燒者すして揉み碎くへりらざる所ありハ再ハ
錢匕入を火に鎔し始めの如く硫黄を加へ而

して後、揉み碎く可し、但し、鉛一錢、ハ、毎、二、硫
黄五分を加ふるなり

燒鉛ハ、濕毒腐腫、反花瘡等の類、貼て奇功あり
又、金瘡腫物等の肉を生せしむるに、極て良し

製鉛灰法

錢、又ハ、陶器、鉛を入れ、火、鎔、錢、篋、以
て、絶へ、を、攪、勻、を、置、鉛、漸、く、灰、に、化、す、此、を、取
て、貯、へ、用、ふ、一、

製鉛黃鉛丹法

鉛灰、以、取、て、錢、に、入、き、炎、火、上、に、煨、き、錢、篋、を、以
て、絶へ、を、攪、勻、を、置、火、を、放、ち、終、は、鉛、灰
黄色とあり、既、に、黄、色、は、好、し、ハ、此、以、採、る
也、即、此、を、名、て、鉛、黄、と、云、ふ、又、鉛、丹、ハ、其、黄、色、は
なり、之、を、所、以、尚、時、久、し、火、上、に、煨、し、て、攪、勻、す
へ、し、黄、紅、色、の、鉛、丹、と、な、る、なり、或、れ、宮、粉、或、ハ、密
陀、を、用、て、も、製、を、一、共、に、其、功、異、な、る、なり、然

まとも其宮粉を用て製したるハ密陀城用て製
したるより色劣るあり某店に於て賣買するを
けみてハ溺鳥連勃知砥及ひか涅糸亜の産を以
て上品と云

鉛丹ハ顔料に用ゆるのこゝに専ら瘍醫家よ
て用也即軽く収斂せしめ且乾燥清涼せしむる
功あり又炊痛の初発の頃に用て良し乾燥せし
むる膏菜よハこれを調和をふるあり

製宮粉法

幅三指模徑長サ九五十程の鉛片と取り其両面
の黒皮按るは活織云成るを落し置くへし而後よ
強気の葡萄酒の耐六百四十錢よ食鹽を一握加
へし火よ上せ煮るへし煮たるハこれを深サ一
尺五寸許の新陶釜よ移し入き而して右の鉛片
成未を以て結ひたれ成右の陶器の中よ其耐の
浸らざる様よ耐の上よ拘り下多て蓋成覆ふひ

元の漏まきふ様は能く塗を塞き温めふ所は置
くと十日餘而後其蓋は開き其中は拘り下を
置きたる鉛片を取り出さへし必を白粉其両面
は密着したりあれを刀で以て清器のこをげ落
をへし而後又其鉛片を取て始めの如く陶器
中は拘り下けて十日餘置き又其両面は着きた
る白粉をちを落を逐し斯の如く其鉛片の盡
る迄幾度ひもあを逐し漸くは宮粉を得るなり

此法を以て白粉糊は取れ得たりハ其粉を白
は入れ少しく雨水を加へあれは粘糊の如くは
ある迄九時半小時の間搗き而してはひてはひ
取り蓋は入れ日よ乾かす可也
又一法ありあるは数箇薄き鉛片を取て前法の
如く耐火入たる壺中は拘り下け片相接せし各
少を故にふれを其内漸くは減蓋は覆ふひて
其上を塗を塞きこれを温めし置くは又ハブル

其仁正ニテスル上ノルガ按ハ苗床の中ニ理
め置くと三十餘日而後ニ取り出さへし然ると
其の鉛片自然ニ鉛粉となりたるありあれば取
て前法の如く少く水を加へて搗き乾らすへ
即宮粉を得るなり但し此壺より取り出した
る儘よくて末と搗きさるるものを名て「シケル
プロット」又一名「シケル」ハルロトト「井ツト」と云
みなり

雜費の少からんと欲主ときハ未熟の葡
萄子或ハ橙の汁或は絞り取りて酎ニ代へ用也へ
し但しあれよて速ニ白粉と好し
顔料ハ上品の「シケルプロット」即右末
白粉あり或は採てあれハ葡萄酒の酎を加へ平
盤上ニ載せ磨を急ぐ斯くするすと此ハ黒色とな
るちを清水の中ニ移し入き洗ひ灌くときハ
白色と好るあり既ニ清水中ニ投入したるハこ

きを沈底せしめ其上清液捨て去り其沈底した
る粉と採て又始の如く葡萄酒の耐を加へる磨
し又清水にておれを洗ひ灌くすり斯の如くを
るし三四度及んで後小乾し干して用うる
最も美麗上品の宮粉とならざりられ水顔料油
顔料共に用ひ

又一法は上品の宮粉八錢食鹽二錢共に磨り
交へ蓋し水に入れ其中に移し入きおれを日照

し晒して能く沈底せしめ而して其上清液徐く
し去り又其上に清水を入る斯の如く水飛を
し三四度及んで後小干し乾し以て顔料に用
ゆらざり

宮粉は和蘭諸厄利亞勿溺祭亞及ひ此他の諸州
に於ても製造を

宮粉は画匠染師等専ら用ひ亦瘍醫家の要薬と
す其切丹と相同しく軽く收瀋清涼せしめ濕液

成乾し且瘡を功あり乃初癩の焮痛及ひ腐腫
と乾燥せしめ又瘡をよ用ひ硬膏軟膏共よ調
和をふるり

製鉛砂糖此一名法

官粉成採て極末よ搗き陶器よ入ま其上よ蒸露
罐よて引きたる耐と投を可自註よ曰其耐の上の
分量ハ勿粉の
三四指横徑よ至
る程つくへしちれと微火よ上せ徐々よ温め
数々攪勻し其耐の味ひ甘くするを度として火

より下し別器よ移し入ま又ちれを微火よ上せ
其面よ薄膜様のもの浮き出るまで蒸散せしむ
多し既よ薄膜其面よ浮き出たらしちれを清
涼の處よ安をへし其浮き出たる薄膜自然よ束
針紋を好しこれ即鉛砂糖なり是成採て陰乾を
へし是を除き去りしハ又其餘分成微火よ上
せ薄膜浮き出るまで蒸散し又清涼の如し安を
可く又其薄膜束針紋を去すられ成除き採るを

一即鉛砂糖ハ皆斯の如くして製し取ふ有り
鉛黄鉛丹及ひ鉛製の諸品を用ても製し得る
然まとも宮粉を用て製し紙上品と成又色
潔白ありと欲するに右の法に因て製し
る鉛砂糖を再び蒸露罐にて引きたる耐と水と
等分にて交和し中にて投し鎔して又ら色を微
火に上せ蒸散して後にて清涼の處に安し浮き出
る束針紋をありし紙を除き取る斯の如くす

と三度及ふときハ最も潔白あり鉛砂糖を得
る
往古ハ熾盛熱飲熱飲腫等治をふ湯を以て
あま紙分量四重を内服せしめたり然まとも今
時の醫家ハ前件にも云ふ如く都て鉛製の薬品
を内服せしむるを絶へるる但し赤遊痰毒の
類爛赤眼等ハ専らられ外用を又あま紙油
に和し疣瘡に着くふと此ハ甚とよく治すな

製マギステリウム。ハン。ロート法

此法製をふよ三法あり其第一法ハ清水と蒸露
罐よて引きたる耐と成等分よ交和し此中よ鉛
砂糖成投し而後よ丹礬精よ自註_度引られ露_罐
たふ_成用二三滴成加入を_成る_{マギステリウム}自
かり沈底を_成なり既よ沈底し_成ハ其上清を
た_成り且水飛を可し

第二法ハ右の如く耐水鉛砂糖成調和したる中
よ葡萄酒油を_成て投入を可し而後よ前法_成
如くに水飛を_成

第三法ハ右の三品_{即耐水砂糖成}採て罫_罫に納めて煮
るなり然るときハ最初ハ色濁て乳汁の如く見
へ_{漸く}よ_{マギステリウム}沈底を_成よ隨て色清く
なるなり此の沈底し_成た_成採て乾し貯よ_成
あれ他あり_成宮粉の最上品なり

マギステリウムハ専ら婦人の粧粉ニ用也又ちれ
以髪ニ塗油ニ和して貼るときハ瘡及ひ都
て頭瘡を治す

製鉛油法

鉛砂糖六十四錢テルペンテイニ精六十四錢共
マトラス種ト按ルよ上ノ部九四指横
径程ハ空所ある様に入き微勢の砂火の上せ煨
を一日然るときハ赤色の液汁となす此赤色

の上清を静小除き去り而して又其上マテルペ
ニラニ精を加へ砂火にて煨を始めて始めの如く
す而後此煎汁を熱を去るときハ滓の如きもの其
底ニ沈むるりちれを其上汁と共に玻璃のレト
ル上ニ移し入き砂火中ニ納め咄註の咄此ハ露
受器を固中度の火勢成以て其九三分之二を蒸
上くへ此自註即皆丹既ニ其三分
のニ成蒸し上を除きたるハ其レトルトを火よ

り下し涼して其尚内ニ存する汁を採るへこ
ま所謂鉛油有り又これを「バルサムハンロー」
とも云ふ

此油ハ悪症の腐腫と清除し且瘡をかり又最
良く腐止む功あり故ニ悪症の反花瘡
貼て甚と良し

至鉛或錫鎔不變灰法

都て鉛或ハ錫或時久しく火上ニ鎔化し置く

きハ其鉛錫焼多て斬くニ灰とありなり此を防
るんハ鉛或ハ錫或鎔化し其焼多て灰ニ化せ
んとす頃其上ニ少しく油脂歴音の類或投し
篋を以てこれを攪勻を盡し既ニ其灰ニ化し
る鉛錫再ハ原ニ復さるなり

復鉛製菜品於生鉛法

鉛灰焼鉛宮粉鉛黃鉛丹密陀等と再ハ原の鉛
化せしめんハ各其凡等分程の炭粉を加へ共

2 鑪壺に納め蓋と覆ふ且其間隙なき様塗
り塞きこれを火中に投し火勢ハ初め甚しく
して後漸く減をへり而してちまう全く冷
たうハ其壺成開き見るへり皆原の鉛に化し
たり此法を以て錫灰及び他の諸金の化し
原金の復を爲す

用鉛製水銀法

鉛一筋 礪砂三十二 鐵瓦磚の粉末三筋 各交和し

て「トル」トに入き砂火成以て煮ると十二小時
火勢ハ漸く強きをへり又其「トル」トノ口
をけ置く器ハ大にして且其半分頃迄ハ水を盛
るへり

以鉛製銀法

精鉛に食鹽又ハ硝石丹礬と合せ蒸露罐にて煨
き取る所の鹽成加へ共煨化し粉末とすへ
し此粉成採りおれり少く丹礬油を加へ濃サ

粘の如くよるし此を鑪壺よ入き蓋を覆ふひ且
能く塗り塞きておれを又一箇の陶壺よ納り而
此上下左右より砂をうけ此砂の温むる程よ火
城照し以て蒸煨をさると十日而後うれを取り出
し其煨化ししる鉛末城採て灰床此按よ原名「ガ」法
前卷よ見よ入き鎔を履し即銀城得るあり都て
鉛五百觔を以て製をると凡ハ毎小銀三百錢餘
城得るなり

泰西七金譯說卷之三終

